

|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 場所、記憶、そこから見えてくるもの   |
| Author(s)    | 吉津, 佑紀  |
| Citation     | 年報人間科学. 28 P.165-P.169  |
| Issue Date   | 2007  |
| Text Version | publisher   |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/3908">https://doi.org/10.18910/3908</a> |
| DOI          | 10.18910/3908   |
| rights       |   |
| Note         |   |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

場所、記憶、そこから見えてくるもの

**Gastón R. Gordillo**  
*Landscapes of Devils: Tensions of Place and  
Memory in the Argentinean Chaco*

Duke University Press, 2004

吉津佑紀

時間の空間に対する優越。この事実は啓蒙主義以降の西洋哲学にとっては自明のものであった。だが近年では、社会を語るメタファーが時間から空間に移行しつつあることが指摘されるようになって久しい。

この動向の背景として、未開から文明への進歩という観点から同時代の差異の説明を試みた、進歩主義から構造主義への理論移行を挙げることができる<sup>①</sup>。この移行に伴い、今日の人文・社会科学の動向は、「人間によって体験され、生きられている空間」<sup>②</sup>とある哲学者が形容したような、空間と人間の本質的關係にますます大きな関心が示されるようになっていくといえる。

では人間にとって「場所」とはどのような意味を持つものなのか。あるいは、場所とそこに刻印された人びとの記憶と「生」はいかに分かちがたく結び付けられているのか。これらの問題群にはじまる、場所と人間のかかわりという近年の関心事を余すところなく描き出したのが、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学の人類学者、ギャストン・ゴードイロによって上梓された本書である。本書は、アルゼンチン北部のグラン・チャコ地区に居住する原住民である西部トバ族（以下「トバ」とする）にまつわる民族誌であり、著者の足掛け十五年以上にわたるフィールドワークから得られたトバによる社会経験の記憶が、場所との結びつきの中で描き出されている。本書のタイトルにも現れている悪魔 (devil, payak, diablo) とは、トバの日常生活、そして社会経験に最も深く結びついている超自然的な存在を指す。すなわち、本書で焦点となるトバの記憶は、この

地域一帯を覆っている自分たちの場所であるブッシュ (*bush, el monte*) と、悪魔との結びつきが参照点となっているのだ。

かつての人類学では、特定の社会空間領域と文化形態とそこに居住する人びとの関係は、固定された所与の対象として扱われていた。だが近年の人類学では、このような本質的視点からではなく、場所性が、実践や権力、闘争、そしてさらには社会関係のネットワークの中で、歴史的に形成されているさまに着目する必要性が認識されるようになってきている<sup>3)</sup>。本書は、この課題を踏まえ、場所と人びとの関係性が創り出されているさまを、トバの歴史的経験と社会記憶の意味を辿りながら詳細に検討している。以下、本書の構成について概観したい。

本書は導入部、結論部をのぞく一八の章から成る。全体としては、トバで共有されている「記憶」に焦点を当てるために歴史的な色彩が強い。しかし、着眼の方向性から六章ごとに一つの部が構成され、それぞれの章がトバの社会空間に対するひとつの側面に光を当てる形となっている。よって、本書全体を通じてさまざまな側面を含み込んだトバ社会を垣間見ることが出来る。

第一部 *"The making of the Bush"* では、主としてトバの社会空間の歴史的側面に焦点が当てられる。トバの過去からの歴史的経験が、比較的最近の経験―労働移民、アングリカン・チャーチによる宣教、「祖先の時代」の終わり、「新しい場所」としてのブッシュの出現など―のかかわりの中で空間性と結び付けられる。特に、ト

バが親和性を投影するブッシュという対象が、いかに物理的、社会的に創り出されていったのかが焦点となる。

まず、本書で考察されるさまざまな場所、例えば小屋、ブッシュ、湿地帯、プランテーションなどの現在のレイアウトが導入的に提示される(第一章)。次いで、アルゼンチン国家による征服を被った、スペイン植民地時代以降二〇世紀前半までの暴力・服従・抵抗と結びつく場所性がトバの社会領域の中に配置されていた過程(第二章)、さらに砂糖プランテーションへの最初の労働移動、アルゼンチン軍隊との衝突の記憶が考察される(第三章)。

第四章以降はアングリカン・チャーチによる宣教活動に焦点が向けられる。まず、宣教団到来にかかわる背景の概観が提示される(第四章)。次いで、宣教団が、国家暴力による恐怖をしのぐシェルターとしての教区を作り出し(第五章)、トバの教化のための新しい規律をトバの社会領域の中にいかに配置したのか、またトバはそれに対してどのような抵抗を行ったのか、その展開が考察される(第六章)。

第二部 *"Bones in the Cane Fields"* では、トバの社会空間の空間的側面に特に焦点が当てられる。ここではアンデス山脈ふもとの砂糖精製所 *San Martin del Tabacal* のちまやまな記憶が焦点となる。だが一方で、ここでの記述背景には、ブッシュや教区にまつわるトバの社会空間が常に対立的に配置されていることは指摘しておく必要がある。

まず、このプランテーションの歴史的概観(第七章)を踏まえた

上で、トバの労働を規定したプランテーションでのエスニックな階層関係とその権力関係の記憶が分析される(第八章)。そして悪魔と食人がもたらす死・病気・恐怖の否定的な記憶(第九章)と、お金と物財の記憶に見られる肯定的な記憶(第一〇章)の両者が織り成す複合的、背反的、かつ同時的な空間性が考察される。次いで、布教区とは対立する場所性であることを強調する夜中のダンス(第十一章)と、自己との疎遠性を強化するサトウキビ畑での抵抗的盗食(第十二章)の実践事例から、プランテーションにおける抵抗の場としての側面も同様に考察される。

第三部、「Foraging until the End of the World」では、第一部、第二部で考察された内容が、文化的、さらには政治的な側面との関連から分析的に論じられる。特に過去の記憶と現在の生活の接続に目が向けられることは特筆すべきである。

まず、プランテーションでの病気、疎外、富の記憶との緊張関係、アングリカン・チャーチによる宣教活動、そしてブッシュに住む悪魔の活動の諸側面の交差を通じて、健康、回復(第三章)、ローカルナレッジ(第四章)、物財に対する貧困とそれに対する非物財に対する富裕(第五章)といったトバとブッシュの関係を示す概念生成の過程が詳細に提示される。次いで、近年の農場や牧場への労働移動がブッシュの社会的な構成にどのような影響を与えているかを見た上で、プランテーションに代わる今日の新たな労働の場も、かつてのプランテーションの記憶から大きな影響を受けていることが示される(第十六章)。そして、これらの実践と記憶を絡め

つつ、一九九〇年代における新しいローカルな社会空間の創出過程が分析される。例えば、貧困の状態で生活している人びとが、入植者、国家の役人、そして自分たちのリーダーとの抗争・交渉を通じて、ブッシュの共同使用についての取り決めに創造する過程がその代表的なものとして挙げられる(第十七章)。最終章では、自由の土地としての記憶を掻き立てる湿地帯との関連の中でブッシュがどのように作り出されているかが考察される(第十八章)。

以上本書の内容を見てきたが、「場所」に対する人びとの関心が高まる今日、本書で提示されるような、特定の空間における人びとの「生」の証を読み取る作業、つまり場所に刻み込まれた記憶を紐解く作業が、人類学の中で重要な意味合いを帯びるようになっていくことはことさらに強調するまでもないだろう。

著者は本書を通じて、「すべての記憶は場所への記憶である」ことを強調し、空間と記憶の関係性がいかに密接に結びついているかを提示している。これまでの人類学的研究は、社会記憶の側面を単に過去の構築や、そこに伴う文化的または政治的な側面を呼び起こす装置としてのみ扱う傾向があった。この反省を鑑みれば、「人間によって体験され、生きられている空間」というトポフィアから社会記憶を見つめ直した試みは、場所にかかわる人類学的研究の今日的要請を的確に捉えているといえよう。

また、本書の特筆すべき特徴のひとつとして、「埋め込まれた矛盾の結果としての場所性」を強調したことが挙げられる。本書を読

めば理解できるように、トバにまつわる社会経験はひとくちで説明できるものではない。このことは、トバ社会にのみならずいかなる社会に対しても正しい。だが、この矛盾は総じて分析の過程で等閑に付されがちである。それに対して、著者はトバ社会の諸側面を概観した後であらためて、「諸矛盾は解決しない。ゆえにそれらは統合しない」(Gordillo: 二五八)と評す。本書の評価すべき点は、矛盾に満ちた諸側面を放置することなく余すところなく受け入れ、かつ研究の焦点のひとつとして大胆に書き綴ったところにある。統合しないまでも並存する諸矛盾を包み込んだ空間性の在り様は、本書の中で十分描き出されている。誤解をおそれずにいえば、本書はトバ社会という矛盾を含みこんだひとつの社会空間総体を対象にして、あらゆる切り口から光を投げかけ分析を行ったものである。それだけ一層、記述内容に重層性が生み出されているといえよう。

また評者の見解からすると、プランテーションをめぐるトバの「生」の実践を描き出した第二部が、本書の記述の中でも最も面白く、場所に関わる人類学の観点からも示唆的なものであると感じられる。というのは、プランテーションという場所性とトバとしてのアイデンティティの構築過程が、多様な二項対立の中で明快に描き出されているためである。以下に例を挙げつつ見てみたい。

第八章では、病気、恐怖をもたらす悪魔について描かれるが、実はこの悪魔は、プランテーションのある山に住む悪魔であって、健康と回復をもたらす彼らの味方であるブッシュに住む悪魔ではない。「悪魔」という同様の媒体を用いながらも、異なる場所に伴う表

内容をその対象に与えることで、ブッシュとプランテーションという場所性を区別している興味深い記述の一例である。

さらに、以降の章で論じられる複数の対立構図を交えた考察も明快なものである。多様な背景、言語、文化を有した人びとが集まるプランテーションは、トバにとってエスニシティの差異を認識させる場所であったが、そこにおいてトバは、ポリビア人を「裕福」な存在、自分たちを「貧しい」アポリジニーとして認識する。プランテーションでのアポリジニー性は、教区では教化理由から禁止されている *numi* と呼ばれるダンスを通じて戦略的に高揚される。つまりプランテーションは、エスニック・アイデンティティとエスニシティの階層化を促進する場であり、さらにその実践自体がプランテーションを教区という場所性の峻別の働きを担っているのである。

二項対立という図式の中に問題系を帰結させてしまうことに対してはもちろん賛否両論ある。だがすべての人間が有している価値把握概念の枠組みを通じて、場所の生成過程を詳細かつ明快に提示したところは大きな意義があろう。

とはいえ、本書の中では *space*, *place*, *geography* という類語がほぼ同内容を指し示すものとして相互互換的に用いられている点、そして「場所」についての具体的な定義が提示されていなかった点から、用語の使用に厳正を欠いた側面があった印象を受ける。固定的な定義にこだわらず、用語の含み持つ微妙なニュアンスの違いを使い分けることで、感覚的に空間や記憶という概念をとらえることが

著者の意図であれば、この批判は当たらないのかもしれない。だが、「場所」とは本書全体を通底する重要な概念であるだけに、その定義には厳正を喫するべきではなかっただろうか。

さらに、著者の長年にわたるフィールドワークを通じた民族誌であるという性格上、記述という観点からもトバに対する愛着は否定し得ない。これが転じて、記述内容に対する批判へと発展する可能性は否めないと考えられる。たしかにスペイン兵士のブッシュに対するまなざしなど、トバ以外の視点も部分的に組み入れられている。だが、トバから距離をおいた記述は相対的に少ない。本書は、概してトバの語りを通じたトバの観点からの世界観が記述の中心を占めているために、非トバ主体にとっての空間性はやや不透明なものとなってしまっている。その結果、同空間を共有する「他者」とのつながりを前提にしたトバの空間性までは浮かび上がるにいたっていないように感じられる。民族誌という性格上、この段階まで要求することはないものねだりかもしれない。だが、本書のようにトバの世界に入り込み、彼らの立場から人間と空間の関係性を、記憶分析を通じて見事に提示してきた点を鑑みると、彼らの主体性を離れた視点からの分析の充実が、本書の内容をさらに深みを与えるものではないかと思われてならない。

しかしいずれにせよ、文中でも指摘したように、空間と人間にかかわる関係性の生成過程を、長期にわたるフィールドワークを通じて提示した本書が人類学的研究に果たした役割は大きい。だが、本

書は南アメリカ研究、人類学という特定の分野に限定することなく、今日の人文・社会科学における場所研究にとって、重要な先行研究としての意義を有していると評されて余りあるだろう。

#### 注

- (1) 西井涼子二〇〇六「社会空間の人類学—マテリアリティ・主体・モダニティ」西井涼子、田辺繁治編『社会空間の人類学—マテリアリティ・主体・モダニティ』、二頁。
- (2) ボルノウ、O. フリードリヒ一九八三『人間と空間』大塚恵一他訳、一三頁。
- (3) 場所における人類学的研究に対する代表的な問題提起は、Gupta, A. & J. Ferguson 一九九七 Behind 'Culture': Space, Identity and the politics of Difference. In A. Gupta & J. Ferguson (eds) *Culture, Power, Place: Explorations in Critical Anthropology*, Duke University Press: 三三—五二頁。あるいは、Cragg, M. & N. Thrift 二〇〇〇 'Introduction' in M. Cragg & N. Thrift (eds) *Thinking Space*: 一—三〇頁を参照のこと。